

# 西照

西照寺寺報「さいしょう」

第14号

2006年1月6日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺  
高岡市吉久2丁目4-40

## 御正忌報恩講勤修

左記のとおり御正忌をお勤めいたします。  
お参りくださいませ。

おつとめの時間

一月十五日 午後二時(御逮夜) 〽

午後七時(御初夜) 〽

十六日 午前九時半(満日中) 〽

布教使 矢口千代磨師 (羽咋郡志賀町光念寺住職)

西谷山 西照寺



## こりこう うさぎ 少利口な兎

昨年の十二月から例年にない大雪となり、雪の始末に追われている毎日です。十何年ぶりでしょうか。屋根に上がって雪下ろしもしました。

ところで、仏典にはあまり雪の話はでてきません。もちろん、暑いインドの国で説かれた教えだからです。地獄という描写でも、熱い方の地獄は、事細かに書いてありますが、寒い方の地獄は数行しか書いてありません。雪が降って凍りつくような寒さということが具体的にイメージしにくかったのでしょうか。

そんな雪の話が少ない仏典の中に、次のような話がでていると山田行雄という先生が紹介してくださいました。

【冬になりますと、大変な大雪になる地方に、一匹の小利口な兎が住んでいました。この小利口な兎は、冬になると、来る日も来る日も、大雪吹雪であることを知っています。そこで、小利口な兎は、夏から秋にかけて、冬の食糧を一生懸命集めにかかりました。

その努力の甲斐があつて、ひと冬は十分に越せるほど集めました。ところが、さて集めた食物をどこに隠しておこうか……。低い目印であれば、冬の大雪で雪の下になつてしまいません。そこで兎は、どれほど

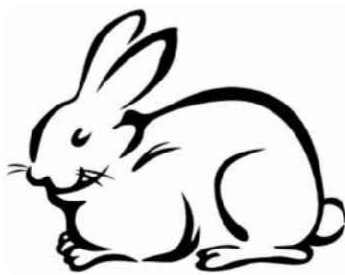
多く雪が降っても雪の下にならない何か高い目印はないものかと、ふとお空を見上げました。すると、たまたまそのお空に、真つ白な雲が一つぽつかと浮いていました。小利口な兎は「しめた」と思いました。冬になって、いかに多く雪が降りましようとも、あのお空に浮いている白い雲までは雪はとどかないであろうと思つたからです。

小利口な兎は、そのお空に浮いている白い雲を目印に、その下へ、夏から秋にかけて一生懸命に集めた食物を隠しておきました。

やがて冬が来ました。今年も例年のごとく、来る日も来る日も大雪吹雪です。でも冬ごもり穴ごもりをしている小利口な兎は「わたしは大丈夫だ。どれほど雪が降ろうと、ひと冬は十分な食物は集めてあるし、どれほどの大雪であろうと、あそこまでは積もらないと思われるお空に浮いた白い雲が目印だ」と、穴の中で大安心とゆっくり寝ていました。

その小利口な兎が目をさまし、そろそろお腹がすいてきました。さて、夏から秋にかけて一生懸命に集めておいたあの食物を取りに行くため、穴を出ました。あたり一面は銀世界、鉛色の空からは、雪が限りなく降っています。

兎が食物を取りに行くためには、先ず食



物を隠しておいた目印を見つけなければなりません。この兎が集めた食物を隠しておいた目印とは、何だったでしょうか。そうです。お空に浮いていた真っ白な雲でした。

なるほど、兎が食物を隠したその時は、お空に真っ白な雲が浮いていたに違いありません。でも空に浮いている雲は、風が吹き来りますと、どこかへ飛んでいってしまうものです。兎は鉛色の空を見上げながら白銀の原野で、「あの時の白い雲はどこだ。あの時の白い雲は……」と目印にした白い雲をさがしまわりながら凍え死にしまいました」という話です。

さて、その小利口な兎とは誰のことなのでしょう。



私たちは、何をたよりとし、目標として、目印として生きているのでしょうか。ともすれば、健康や財産、地位や名誉、家族であったり友人であったりします。しかし、無常の風が吹けば、そのようなものはどこかへ飛んでいってしまうって何の役にも立ちません。雪の原野で凍死した小利口な兎と変わらないことになってしまいます。

だからといって、お金も家族も捨てて仏道を修行しなさいというこ

とを浄土真宗は言っているわけではありません。確かに生きていくうえでは、お金は必要ですし、家族はたよりです。ただ、それらは自分の死を乗り越えて、死を貫いていけるような目標やたよりとはならないということなのです。

道綽禪師という方は、大風が吹くと木は普段傾いてた方に倒れると云われました。

時折、病氣などで死に直面した方の絶望から憔悴しきった様子を見かけることがあります。癌の末期患者のところ々に数ヶ月間仏法の話をする為に通ったこともありました。ですが、普段から自分の死を乗り越えていける道を見だしていない方は、いざというときに混乱して旨いきません。あつちへフラフラ、こつちへフラフラどちらに倒れるのか不安でたまりません。やはり、元気で頭もしっかりしていると、自分に死を乗り越えていく道を見だしている方は、いざというときは、ちゃんと倒れるべき処へ旨く倒れるようです。道綽禪師もそういうことを云われたかったのでしよう。

浄土真宗は、自分の生死を貫く確かな目標と抛り処を仏様の普遍的な精神に学び取って、今の私の生活を見据えていくことの大切さを教えてきたように思います。(文責 住職)

## 真宗の行事

## ひがんえ ＜彼岸会＞

春分の日、秋分の日を中日とし、前後各三日の七日間、年二回行われる法要です。この行事は日本でのみ見られるようで、聖徳太子頃よりはじまったとされています。一般的には江戸時代頃より寺参りや墓参りがはじまったようです。

彼岸（彼の岸）とは、悟りの世界、仏様のお国（浄土）という意味で、此岸（この岸）すなわち我々の迷いの世界に対しています。

もとは親鸞聖人が七高僧と仰がれた善導大師の観経疏の中に、観無量寿経の日想観を註釈して「冬夏の両時を取らず、ただ春秋の二際を取る。その日正東より出でて直西に没す。弥陀仏国は日没の処に当る」とあるように、春分の日と秋分の日の日没のところに阿弥陀仏の浄土があると心に思い浮かべるといふところから来ているようです。平安時代の浄土信仰の隆盛とともに仏教行事として定着していきました。

彼岸会には、彼岸である仏の国（浄土）に往生された先祖をしのびつつ、やがて私も彼岸へと導いて下されるお念仏の教えに耳を傾けたいものです。

さて、最近は便利になりまして、車ではじめて行くところでもカーナビ（カーナビゲーション）があれば安心です。運転席の横にテレビ画面の小さいのがついていて、次の信号右折してくださいとか、100メートル先の交差点を左へ曲がってくださいとか知らせてくれて間違いなく目的地まで案内してくれるようになりました。以前でしたら、地図や案内板をみながら、いろいろ迷ったものです。

一番正確なカーナビはGPS（グローバル・ポジショニング・システム）という衛星電波を使ったシステムだそうです。地上2万メートルの所に24個の人工衛星が地球を回っており、そのうちの4つの電波を捉えて自分の位置を正確に割り出すから、間違いなく目的地まで行ける。つまり、自分の位置をずっと高いところから見ている。その様子を送ってくれるから間違わないということです。

私たち（此岸）の人生もそうかなと思います。自分で自分のことを分かっているようでも、自分の姿が全く見えていません。その為に迷ったり、失敗を繰り返し、悩みの多い日々を送っています。

仏法を聞くと、人間（此岸）を超えた大いなる仏の眼（彼岸）から私の姿を見させていただき、確かな安心できる道を見いだすことだと思います。

